

大窪詩佛初期詩集にみる評語について

——習作期における問題意識——

山 口 旬

一 評語の意味

江戸中期から後期にかけて、江戸の漢詩は古文辞格調派から清新性靈派へと大きく転換した。その理論的な先鋒は山本北山であり、その著作『作詩志藪』の出版は擬古的古典主義的な詩風から現実的日常的な詩風へ転換する大きな契機になったのである。

この新風は地方にも影響を与え、こうした新しい詩風を慕って北山門下には、各地から有能な若手詩人たちが集まった。地方で詩人を志す若者にとって、文人として独立するにせよ、また立身の手段にするにせよ、中央で学んで名をあげるのは考えられる有力な生き方であった。そうした、受け皿のひとつになったのが、新詩風の理論で名高い山本北山門なのであった。北山自身のものにこだわらない磊落な性格もあいまって、門人は多数になった。

例えば、四日市の間野可亭という詩を志した青年は、江戸から四日市に流落していた新詩風の詩人である菊池五山に師事し後には江戸へ進出し、山本北山の竹堤社に参加する。そして五山の推薦で静岡の藤枝の詩社の指導にあたり、また江戸へ戻り『宋三大家詩話』

などの編著を成した。その人生は、地方から中央を目指した地方若手詩人の生き方の典型と言えよう。

後に、江湖詩社の四才として名をあげ文化文政期の詩壇を牛耳っていく当の菊池五山や大窪詩佛なども若き日にそうして江戸の詩壇に身を投じたのである。

このように地方から中央へ集まった若手詩人たちは、詩に関してどのような問題意識を持ち活動していたのであろうか。また、それを受け入れた中央詩壇は、どのような構造をしていたのであろうか。清新性靈派の新風を奉ずる詩人たちは緩やかであるが流派を成していた。そこには、各詩人の個性もあるが、流派としての動きも見られる。この新詩風は、積極的意識的に推進されており、そこには、大きな意味での文学集団としての意志が働いていたようだ。

この流派の動きとして中央詩壇は、詩に関する活動、例えば、詩社としての活動、教育・研究の活動、広報的活動など様々に展開させていた。ここではその中で、若手の漢詩の学習がどのようになされたかを実際の作品の上から探っていきたい。

彼らは、どのような観点から詩作していたのか、何を問題意識と

していたのか。残っている資料は、結果としての作品がほとんどである。そこからは、どのようにして作品が成立したのかの途中経過は見えにくい。そこで、注目されるのは詩に関するコメントを含む文章である。ここでは清新性霊派の代表詩人大窪詩佛の初期の習作的作品群とその周辺に多く見られる評語を探ることで、その意味を考えてみたい。

ここでいう大窪詩佛の初期作品群とは、第一詩集の『卜居集』（寛政五年、二十七歳）、唯一の詩話『詩聖堂詩話』（寛政十一年、三十三歳）、第二詩集『詩聖堂百絶』（寛政十二年、三十四歳）の三書を指している。第三詩集は『詩聖堂詩集初編』（文化七年、四十歳）であり、これは『詩聖堂詩集』としてその最期まで、二編、遺稿と書き継がれる詩佛の代表的な詩集であり、習作期を脱したという意識で書かれたと考えられ、年代的にも第二詩集と十年隔たっている。しかし、その初編だけは二編以降にはない習作的な特徴もわずかに残っている。また、こうした自身の著作以外で注目されるのは、やはり清新性霊派の詩人である柏木如亭が信州中野に開いた詩社の晩晴吟社のアンソロジーである『晩晴吟社詩』（寛政十二年、詩佛三十四歳）である。ここには、木百年、高聖誕など晩晴吟社の詩人たちの詩に詩佛の評語が載せられているのである。

これらの作品、特に『卜居集』『詩聖堂詩集初編』『晩晴吟社詩』には、本文である漢詩の他に、その評語の部分に大きな紙面が割かれているのが目に付く。頭注の書き入れなどを含めて出版するのは、漢詩集では一般的であるが、本文と並べて評語に大きな部分を与え

るのは、それほど例がないように思われ、大窪詩佛という詩人の周辺にそれが集中して見られるとすれば、そこには何らかの積極的意志が働いていると見るのが妥当であろう。

また、『詩聖堂百絶』にはそうした評語はないが、近い時期に出版された『詩聖堂詩話』は漢詩に関する様々な話題を書く詩話形式の散文作品となっている。この二書は後述するように、内容も時期も重なっており、漢詩と評語を別の書にまとめた一組の著作と考えることもできる。評語に関する意欲を詩話という形式で表現したのである。そのように考えれば、この二書も前述の評語付きの漢詩集のヴァリエーションと見られる。

こうした評語の中には、その作品のポイントや狙いなど、作者が何に留意して詩作したかが語られていることも多い。それは恐らく、評者個人の個性を越えて当時の若手詩人たちの問題意識をそこに読むことができる。若手詩人たちが中央の詩壇でどのような切磋琢磨をしていたのか、その内容の一端がこうした評語の中に見られるのである。

さて、こうした評語を多く含む資料的価値のあるユニークな漢詩集が残ったのは、これは大窪詩佛の評語に対する意欲であったと言つてよい。普通の詩人は結果としての作品だけ残ればよしとするのであって、場合によっては若き日の習作を自ら捨てたり燃やしたりしてしまう場合も少なくない。その点、詩佛のこうした記録好きは特殊であり、個性と言えよう。形式へのこだわり、というその詩風にも連結している問題を含んでいる。また、ごく若い年代で個人

詩集を出版するという事実も、漢詩を個の表現と意識する傾向の表れと思われる。

このように、詩佛の初期作品の周辺の評語は、清新性靈派の漢詩学習の実際を知り、また詩佛自身の個性を明らかにし、個の意識の進展の資料となるのである。

二 評語の実態

(一) 『卜居集』

『卜居集』は大窪詩佛の第一詩集である。寛政五年に中野素堂の評を附して出版されている。中野素堂の評は本文の中に組み込まれており、量から言っても、本文に匹敵していて、あまり例のない形式になっている。

さて、この出版当時の詩佛と素堂は、どのような状況におかれていたかは、寛政十一年刊の『詩聖堂詩話』の中で、山本北山門下について、

雨森牙卿・太田錦城・鷹野魯屋・坂井子衷が輩の如き、詩を能せずと謂ふには非ざれど、也た詩人を以て目し難きなり。詩人を以て自ら許す者、獨り素堂と余とのみ。

と語っている。北山門下を代表する二人の詩人と自負していたことが知られる。また、『卜居集』の跋文に、素堂（名、正興）自身が、詩佛（字、天民）について、

天民、平生、篇什を累る毎に輒ち之を正興に示して批評を召すと書いており、素堂は若き日の詩佛の詩人としての第一の盟友で

あった。二人は各自別々に詩作していたのではなく、互いに批評しあっていたことが想像される。このような関係の二人であれば、詩佛の詩集に素堂が評を附けるというのは、自然なことであり、そこには二人が共通して抱えた詩作上の問題点が露出していると考えることが出来るだろう。そう考えると、ここには当時の詩壇の詩作の場の議論や方法論の実際の具体的運用などが見て取れる貴重な資料と思われる。

ただ、この評そのものを公に出版することに関しては、やはり素堂が『卜居集』の跋文で、

是れ一時の事、何ぞ圖らんや、『卜居集』を刻するに至て、附するに吾が批評を以てせんとは。我れ、吾が心に安せず。

というのが謙辞もあるが、こうした評は公にするものではないという常識的な判断であり、出版には詩佛の側の意欲が強く働いたと見られる。同じように本文に割り込むように評が載せられる形式は、その後も詩佛周辺の、『晚晴吟社詩』『詩聖堂詩集初集』などで集中的に見られ、他にこれほど評にこだわった詩集も見当たらないからである。

その評語の実際は、どのようなものであったのか。最も多く見られるのは、作品の可否を論ずる評である。『卜居集』冒頭の一首とその評は、

卜居

宅向雲林烟浦移 宅は雲林烟浦に向て移る

吟眸且喜十分奇 吟眸 且つ喜ぶ 十分の奇なるを

新愈夜半聞潮落 新愈夜半 潮の落るを聞き
 舊樹朝來判曉遲 舊樹朝來 曉の遲きを判ず
 依浪輕鷗猶未熟 浪に依る輕鷗 猶ほ未だ熟せず
 賣醪老叟已相知 醪を賣る老叟 已に相知
 一身從是何嫌瘦 一身 是より何ぞ瘦るを嫌ん
 觸興時改舊詩 興に觸て 時時 舊詩を改す

清新圓熟、柳垞の本色。前聯、絶好。柳垞、常に謂ふ「佳句は得易くして佳詩は得難きなり」と。圓熟の難きは、諸體、皆然らざること莫し。而して七言律に至つては最も極なり。是の詩、第一句、家の移るを述ぶ。次句、其の景を賛し、三四、雲林烟浦を分承し、四五、一転して其の事を言ふ。七の句、其の所に安じて以て身を終ふに足るの意有り。「從是」二字含蓄多し。末句、興に觸れ、詩を改し、其の事と其の景と相称せらるなり。是れ應に上十分の奇なるべし。以て一篇を結ぶなり。七言律體を得て、能く其の言に酬ふと謂ふなるのみ。

最初の評らしく、力の入った『卜居集』の評の中でも、長文の評になっている。その骨子は、七言律詩における構成の重要性である。句と句をどのように按配するかを細かく述べている。詩佛の「佳句は得易くして佳詩は得難きなり」の語を引いて、部分的な表現の面白さよりも一首全体としての表現を優先するという立場である。この言葉は後に『詩聖堂詩話』でも詩佛自らも述べているように、持論だったようだ。

この律詩の構成に関する評は、冒頭の数首に評されるが、全体を通じては数は少なくなる。全体を通じて多く見られるのは、やはり部分的な表現の可否に関する評である。これは、詩作の実際の場ではやむを得ぬことであろう。日常語ではなく伝統的な詩語を用いる漢詩では、伝えたい思想と実際の表現の齟齬があつては表現として成立しないので、詩作の基本はやはり句の表現から始めなければならないのである。例えば、

潮來吞缺岸 潮來て 缺岸を呑み
 月湧出危檣 月湧て 危檣を出す
 の聯に対して、

前對、佳甚し。「吞」「出」の二字、大巧、斬新、道ひ易からず。という評などが見られる。潮が呑み、月が出す、の表現を高く評価しているのである。

また、詩の扱う全体的な内容に関するものもある。例えば、「山莊十首」の第三首で、

我愛山莊好	我れ山莊の好きを愛す
春風滿座馨	春風 滿座に馨し
蝶迷焚麝室	蝶は迷ふ 麝を焚く室
鳥觸護花鈴	鳥は觸る 花を護する鈴
稚子詫書篆	稚子 篆を書することを詫ひ
老僧求寫經	老僧 經を寫すことを求む
簪毫忽出見	毫を簪して 忽ち出て見る
恠石在前庭	恠石 前庭に在り

頗る富貴の相有り。十首中、下等の詩なり。

という詩の表現法ではなく、表現された内容に関する批判がある。麝香という高価な香や、庭に石を置くというのが、山荘の清らかさに似つかわしくないというのであろう。また、詠物、題画などの方法論に関する表現のコメントも見られる。例えば、題画詩は画に題した詩であることが詩の表現そのものからわかるのが上等であるなどである。

これらの作品の可否に関する批評は、漢詩を作る場では最も一般的なものであり、修行の場で若手の詩人たちがどうしても避けることのできない問題である。しかし、それだけにそこには、詩佛や素堂、また性靈派に特有の問題は出にくい。

次にもう一段高いレベルで詩の表現を論じている評をみよう。

「山莊十首」の第五首の五六句目に、

修得焚香法 香を焚く法を修し得て

栽花種海棠 花を栽れば 海棠を種ゆ

に対して、

五六、風韻、言ふべからず。圓成、對偶に拘らず、喜ぶべし。

と述べている。律詩における対句は形式的な条件であるが、内容によつては、対にこだわらなくてよい、という評である。この五六は全く対になっておらず、実は律詩の条件を満たしていないので、厳密には律詩と言えないのだが、それを可としている。「風韻」を重んじたのである。勿論、これは失敗による対句くずれではなく、意識的な習作なのである。これは、現実主義的な性靈派の詩論による

詩作への応用であらう。他にも、「性靈の詩、格の卑しきを以て棄つるを容れず。」などの同様な主張が見られる。華やかな虚構より實際を重んじている。意識的に性靈派的な詩論に基づいた習作であると思われる。

他に、「下居集」の評として、考証的な評が見られる。

「不」字、平聲なり。柳埜、嘗て曰ふ、「不」字兩聲なり。

杜少陵「長江詩」

浩浩終不息 浩浩 終に息まず

乃知東極臨 乃ち知る 東極臨

(中略)

の如き、皆な正律中に於て「不」字を平用す。他、枚舉に勝へず。是れ故、「正字通」曰はく、「入聲平に轉ずと雖ども、其の義、則ち一なり」。考證明確、今人、概に復た知る者無し。謂ふ所の廢を興こし絶を繼ぐ、其の功、偉なり。

などである。「不」という字の平仄をめぐつて両用されるといふことを、多数の用例を並べて考証している。『詩聖堂詩話』にも、

梅外、詩を作る毎に新裁を出す。然れども、性疎放、動もすれば平仄失粘する者有り。余、梅外の詩を讀む毎に必ず先づ其の失聲を正す。

という平仄などに対する厳格なこだわりが示されており、詩佛の輕妙で機知あふれる詩風からは、うかがいにくい詩作の態度がわかる。また、正月の門松を描いた詩の評語として、

歲首、松竹を門戸に立つ、邦俗なり。『歲華紀麗』に云ふ、「松、

高戸に標す」と。『董勛問礼』に云ふ、「松枝を戸に繫ぐ」と。彼方も亦た之れ有り。

という、詩に描かれた景物の考証も見られる。他に、日本の俗信である「鳥影」や豆腐の異名の考証などもある。

素堂の評語も「飄逸愛すべし」のごく簡単な感想を述べたにとどまるものもある。この傾向は『卜居集』後半に著しい。この程度の評語は特に『卜居集』の特徴とは言えず、他の多くの漢詩集の頭注などと同様のものである。

他には、例外的ではあるが、詩佛が素堂自身に寄せた詩の評には、
寄中野子興（中野子興に寄す。）

想君身在水雲隈 想ふ 君が身は水雲の隈に在ることを

一片閒心無點埃 一片の閒心 點埃無し

欲識故人風骨瘦 故人の風骨の瘦るを識らんと欲して

窓前折得一枝梅 窓前 折得たり 一枝の梅

此の詩を贈るに、羅紋箋の梅花枝を印する者を以て、之を寫す。亦た一韻事なり。

と簡単なエピソードを綴るものもある。素堂に詩佛が贈った詩とそれを記した詩箋がよく合っていた話題である。

以上のように、第一詩集『卜居集』の中野素堂評は、部分的な表現に関するもの、作品全体に関するもの、詩作の考え方に関するもの、詩の内容の考証に関するもの、詩に関するエピソード、と幅広く多彩なものであった。そして、これは素堂の独自の意見というだ

けでなく、詩佛との交流の中で書かれた評語であつたらう。つまり、この時期の二人の詩に関する興味や問題点を伝えていると思われるのである。

(2) 『詩聖堂詩話』『詩聖堂百絶』

『詩聖堂百絶』は、詩佛の第二詩集であり、寛政十二年刊行である。この書は、多くある『百絶』という、絶句百首を並べる形式であるためか、評は全く書かれていない。しかし、前年の寛政十一年刊行の書に、『詩聖堂詩話』がある。こちらは、書名通りに詩集ではなく、もっぱら詩に関する言わば評論の書である。そして、詩佛という号の初出でもある。この二書は、詩の作品と評語をそれぞれ補完しあう関係であると言えるだろう。『詩話』で述べた理論の実作品が『百絶』といえる。内容もかなり重なっており、『百絶』の自評・自注が『詩話』になつている部分も多いのである。例えば、『百絶』の、「棟棠花」（山吹の花）の結句、

幾雙黄蝶落風前 幾雙の黄蝶 風前に落つ

に関して『詩聖堂詩話』十五段に解説がある。

余も亦た嘗て唐人「鷺」の詩、

一樹梨花落晚風 一樹の梨花 晚風に落つ

の意を反して以て「棟棠花を詠じて」云はく。

幾雙黄蝶落風前 幾雙の黄蝶 風前に落つ

文中の唐人とは、杜牧を指す。鷺が舞い降りる風景を梨の花が晚風に落ちたようだと述べた一句である。詩佛はそれを、山吹の花が

散るのを幾組かの黄色い蝶が風の前に舞い降りた、と換骨奪胎したのである。「意を反して」とあるのは、前者は鳥を花に譬え、後者は花を蝶に譬えた意である。花の用い方が逆なのである。詩佛の古人の詩の利用に関する工夫がよく理解できる。

このように、両書を併せ読むことで、十全な読解ができるようになっていく。そう考えると、本論で述べている、詳評の附いた漢詩集と近い性質を併せ持つていると思われる。

『詩聖堂詩話』は、形式的には中国の『随園詩話』の形式を踏襲したものであり、そのため内容は詩の評よりも、詩人とその作品の紹介が中心であるが、その文章の合間や、独立した短い段などに批評的な内容が見られる。例えば、詩の表現で、「平淡」に関して、

詩、平淡を貴ぶ。平淡は詩の上乗なり。然れども平淡、奇險中を經來らざれば則ち徒に是れ村嫗の絮談のみ。全く氣力無し。

と述べている。単に平淡ではなく奇險を經た平淡であるべきと言うのである。また、詩の虚構に関して、古人の詩句の用い方、詩の材料について、など『卜居集』の素堂評とも重なる内容が散見される。他に、柏木如亭とのエピソード、天折した詩人の顕彰などの段があつて注目される。これらは、後の詩佛の盟友である菊池五山が後に著す『五山堂詩話』とも内容的に共通する。清新性靈派の流派の動きとしては、そうした連続が見られる。

以上のように、『詩聖堂詩話』『詩聖堂百絶』の二書の一部にはやはり『卜居集』の評語と重なる性質が見られた。その詩話という性質上、作品の構成を細かく論評するものは少ないが、おおよね内容

は共通している。

(3) 『晚晴吟社詩』

詩佛周辺の評語は『卜居集』の詳評形式から『詩聖堂詩話』という詩話形式へと変化したようにも見えるが、漢詩本文に詳評を附けるといふ形式も当然継続していた。

寛政十二年に信州中野で柏木如亭が開いた詩社である晚晴吟社のアンソロジーである『晚晴吟社詩』が刊行された。詩の作者は地元信州中野の晚晴吟社の社友で柏木如亭の門人である。そして、この小さなアンソロジーに『卜居集』と同じ形式で評を附けたのが大窪詩佛である。

ここで詩佛は『卜居集』における素堂と同じように、作品の可否を表現の面から述べることが多いが、古人の詩句との関係を、詩佛は、

寒窓昨夜三更雨 寒窓 昨夜 三更の雨
溪水今朝一尺肥 溪水 今朝 一尺 肥ゆ

三四、意思真率。韓握の三更聯、石湖の三寸對、皆な却て壓倒す。

などと述べて、記述は簡単であるが、『卜居集』の素堂評の、
小溪三寸雨 小溪 三寸の雨
老屋半間雲 老屋 半間の雲

第三句の巧、「小」の一字に在り。以て「昨夜榕溪三寸雨」の句を壓倒す。

などと同様の記述をしている。前者の「石湖の三寸對」は、後者の「昨夜榕溪三寸雨」と同じ句を指している。同じ范成大の対句を取り上げそれをどのように自分達の詩に取り込んでいくかが素堂と詩佛に共有の問題だったのである。

また、性靈の詩に關して、

秋信不知何處早 秋信 知らず 何の處か早きを
庭前已染鴈來紅 庭前 已に染む 鴈來紅

情致、織工と雖ども、而して嚴然として生靈の詩なり。格調の徒、復た夢見ること能はず。

などの評で、形式とその表現における、性靈派的性質を述べている。織細で巧妙であるという表現の特色よりも、その内容が実際に即していることを問題としている。また、

能く平易を以て音險を為す。宋人の手段。

など、平易な詩風の記述もある。『詩聖堂詩話』の奇險を経た平淡の説と共通する主張である。

以上のように、『晚晴吟社詩』は小冊であり評語は多彩とは言えないが、『卜居集』『詩聖堂詩話』と同じ方向性をもった評語となっている。そして当然であるが、こうした評を受け入れた晚晴吟社の詩人達もそうした主張の下に作詩していたのである。

(4) 『詩聖堂詩集初集』

『詩聖堂詩集初集』は、作品の製作年代は、前述の諸作品と連続しているが、刊行は文化七年とかなり遅い。既に詩佛は詩壇の中心としての地歩を占めていた。『詩聖堂詩集』は、その後、二集、遺稿と継続的に刊行され、詩佛の詩業をほぼ概観できる作品集となっている。従って、それは習作期を脱して後世に自身の作品を残そうという自負のもとに作られたと言つてよい。

詩の評に關しては、二集、遺稿、また他の三つの遊歴の記念詩集などと比して、初集だけが大きく異なる特徴を持っている。形式は、『卜居集』や『晚晴吟社詩』と同じで、詩によつて長短はあるが、かなり長文の自評自注が附されている。そうしたものは以後の詩集には全く見られないのである。その内容は、例えば「蝶使」という律詩の冒頭で、蝶の異名として「鳳車」の語を用いたことに関して、

『古今注』に、蛺蝶、一名を鳳車。『宋史職官志』に、御史に監香使有り。『開元遺事』に、明皇、春宴に宮中妃嬪をして各の豔花を挿さしむ。帝、親ら蝶を捉へ之を放つ。蝶の止る所、焉に幸す。後、太眞、寵を専らにして、遂に此の戲を罷む。

といった評が附いている。この内容は、評というより注であつて、それまでの評とは大きく内容が異なつてゐる。この詩集の他の詩に附された評も概ねこのような内容なのである。詩の用語の典拠を示すのが主な内容であるが、通常の詩には使われないような、特殊な語彙が多く、むしろそうした語彙に対する興味から作詩した作品が多い。

『卜居集』以下の初期作品評語が多彩であったのに対し、その一部である考証の部分だけを生かした評語となっているのである。

三 評語の展開

さて、前章で詩佛周辺の評語の様相を年代、作品順に見てきたが、これらの評から何が読み取れるのであろうか。そこからは、当時の清新性靈派における漢詩学習の実態が浮かび上がってくるのではないだろうか。古人の表現をいかに自分の表現に取り込んでいくか、幅広い考証の知識を詩の表現に生かしていくか、清新性靈派の理論を実作にいかに関用していくか、などが詩佛を中心とする清新性靈派の若手詩人達の共有の問題意識であった。

最後に、このような評語に見られる問題意識が、その後どのような展開を見せたかを考えてみたい。

個々の作品の可否といった内容は、これは詩風や流派を問わず、普通に行われることであり、量的には多いものの、詩佛や清新性靈派だけの問題は少ない。注目されるのは、清新性靈派の主張を含んだ評、考証的評、挿話的評、説明的評、などである。実はこうした詩佛の批評の意欲は、その後の詩佛の活動、清新性靈派の展開に収斂されていくと思われるのである。

詩佛の多彩な興味と意欲は、まず最初に詩に詳細な評を附すという形式を生み出した。『卜居集』では、実際の執筆は盟友である中野素堂であったが、その背後に詩佛の意欲があっただろう。そして、その内容の多くは二人の議論を反映しているものと見られた。そし

て、例えば、「不」の字の平仄の問題などは、後年の著作『兩韻便覧』などの基をなすものであろうし、説明的な評は数々の作詩入門書などに、考証的評は、『聯珠詩格』などの校訂に、性靈派詩論や詩人のエピソードなどは『詩聖堂詩話』につながっていく。そして、その『詩聖堂詩話』は随園詩話形式という、詩を語る散文にもっともふさわしい形式を手に入れた。『晚晴吟社詩』では、『卜居集』で中野素堂に任せた評を自ら書くことになる。内容が重なるのは前述のとおりである。

『詩聖堂詩集初集』がそれ以前とも以後とも異なるユニークな考証ばかりの評を附しているのが注目される。その出版は文化七年で、その詳評のスタイルが変わらないものの、内容は考証一辺倒になって以前の多彩な内容が影を潜める。そして、これ以後、詩佛はこうした詩に関する散文はほとんど書かないのである。

これは、詩佛個人ではなく、性靈派の全体の流れから考えると、説明出来るようである。文化文政期の江戸詩壇は、大窪詩佛と菊池五山が牛耳を執ったと言ってよい。そして、詩佛が多彩な著作を残したのに対し、五山はほとんど唯一の大著『五山堂詩話』正編十巻、補遺篇五巻を残したのである。つまり、後年二人は役割を分担したのであり、二人の役割はよく棲み分けができていた。詩佛が散文を書かなくなった時期の文化四年から『五山堂詩話』は刊行が始まり、以後足かけ二十六年の長きに渡って書き継がれるのである。そして、それは江戸詩壇だけでなく全国の詩人に強い影響を持った。

この『五山堂詩話』であるが、その詩話形式を最初に用いたのが

詩佛の『詩聖堂詩話』だったのは興味深い。『詩聖堂詩話』最終段では、続編が書かれるように予告してあるが、評語が書かれなくなるのと同じように詩話の続編も書かれたいのである。後に『五山堂詩話』も発展し、独自の展開を見せていくが、最初の巻一・二は『詩聖堂詩話』と大きく内容が重なり、清新性霊派の広報的な性質が強いのである。『五山堂詩話』の全巻に登場する唯一の詩人が詩佛であるというのも、その強い結びつきと役割分担を思わせるのである。

このように、大窪詩佛の初期作品とその周辺に見られる評語からは、当時の新進詩人の詩作における問題意識、そうした評語の中心にいた詩佛自身の個性、またその後の清新性霊派の展開、もうかかえる興味深い読み物となっているのである。そして、このような批評活動が大きな原動力となつて、また地方詩壇とも連係しながら、中央詩壇は進展していくのである。

注1 拙稿「五山堂詩話」に見る間野可亭——地方詩壇における役割——」

『成蹊國文』四十三号 平成二十二年三月刊

2 拙稿「詩聖堂詩話」注釈（上）」『成蹊人文研究』十八号 平成二十二年三月刊

3 拙稿「五山堂詩話」の章段構成」『成蹊人文研究』十六号 平成二十二年三月刊

※本文引用に関して『卜居集』『詩聖堂詩話』『詩聖堂百絶』『晚晴吟社詩』は、国会図書館本、『詩聖堂詩話初集』は、汲古書院『詩集 日本漢詩八』の影印本により、私に訓み下した。

（やまぐち・じゅん 大学院博士後期課程在学）